

自然と私そして漆

Mother Nature, I and Urushi

水上 修

MIZUKAMI Osamu

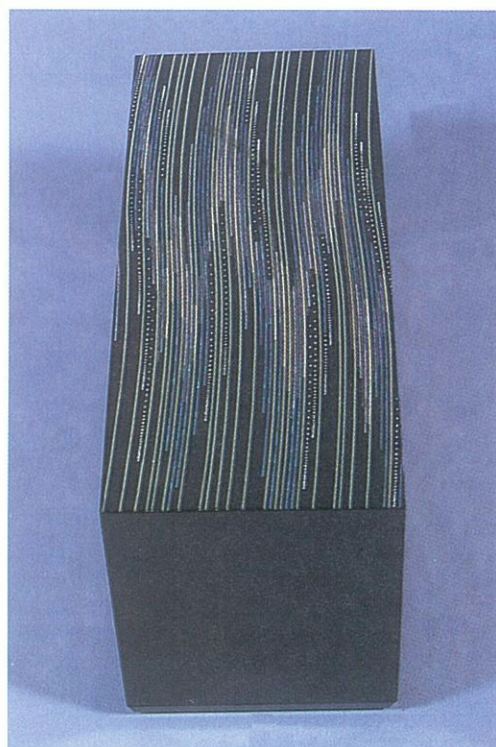
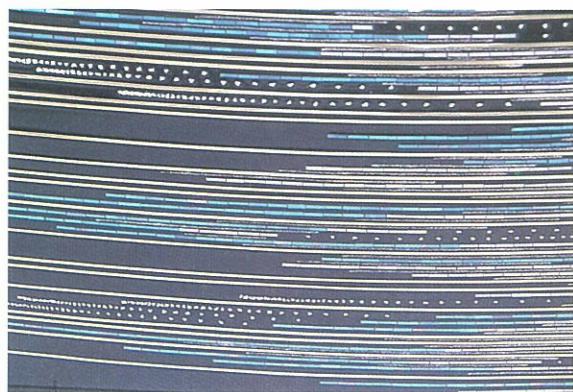
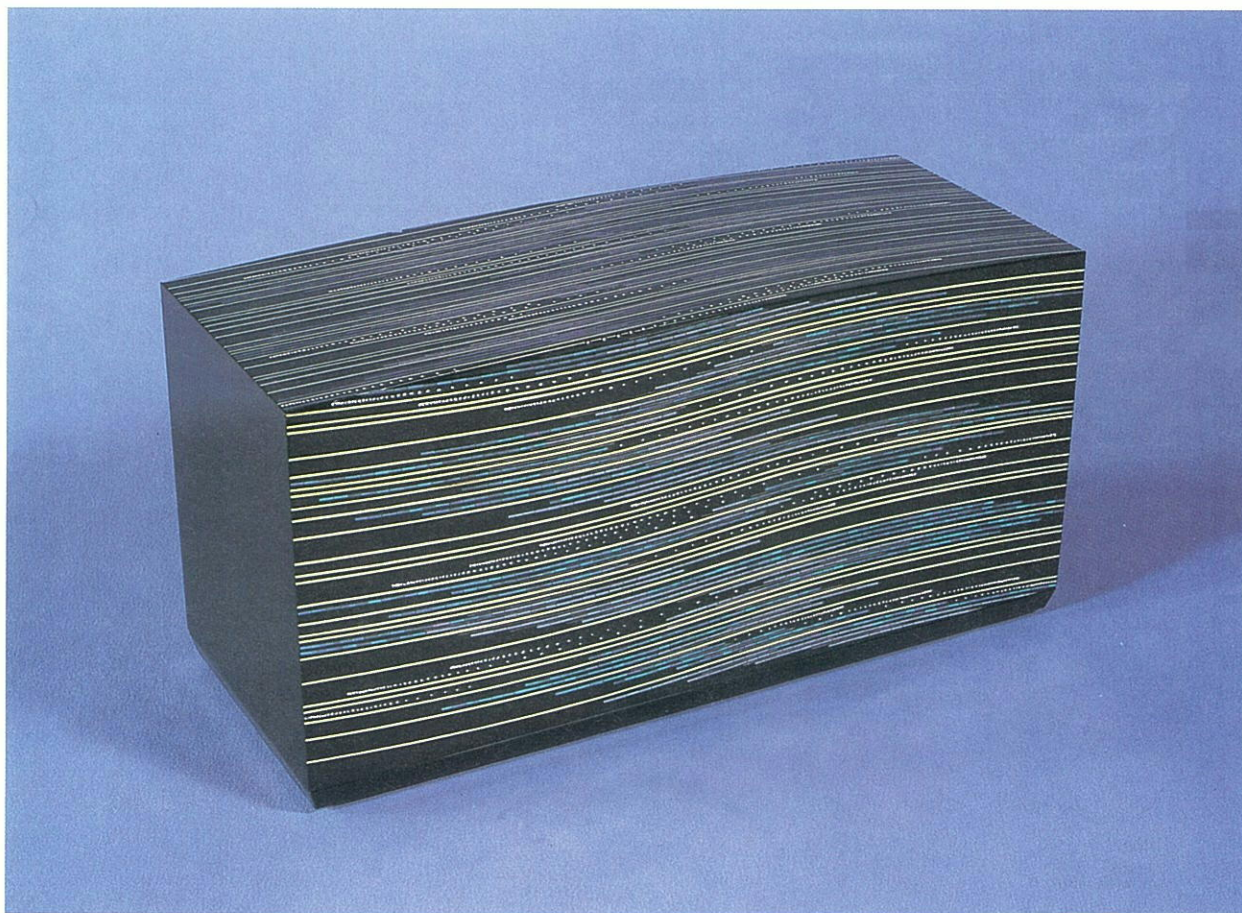
1994年夏、私は月山山頂を目指し赤沢川源流部を遡行していた。ほとんど人が入らない溪なので自然が多く残っている。清冽な水の流れ、黒い岩肌、木々の輝き、凜とした空気、それらが私の体の中に染み込んでくる。夜、シュラフに潜り込み夜空を眺めれば、その果てしない美しさは勿論のこと地球が自転していることさえ感じられる。この暗闇の中で動物達も同じ様にすみかで眠りにつこうとしているのだろうか。

崖や滝を登り溪を泳ぐ厳しく辛い遡行である。月山山頂に着く頃、体はポロポロに疲れ果てていても、私は自然に順応しはじめている自分の中の生命を感じた。

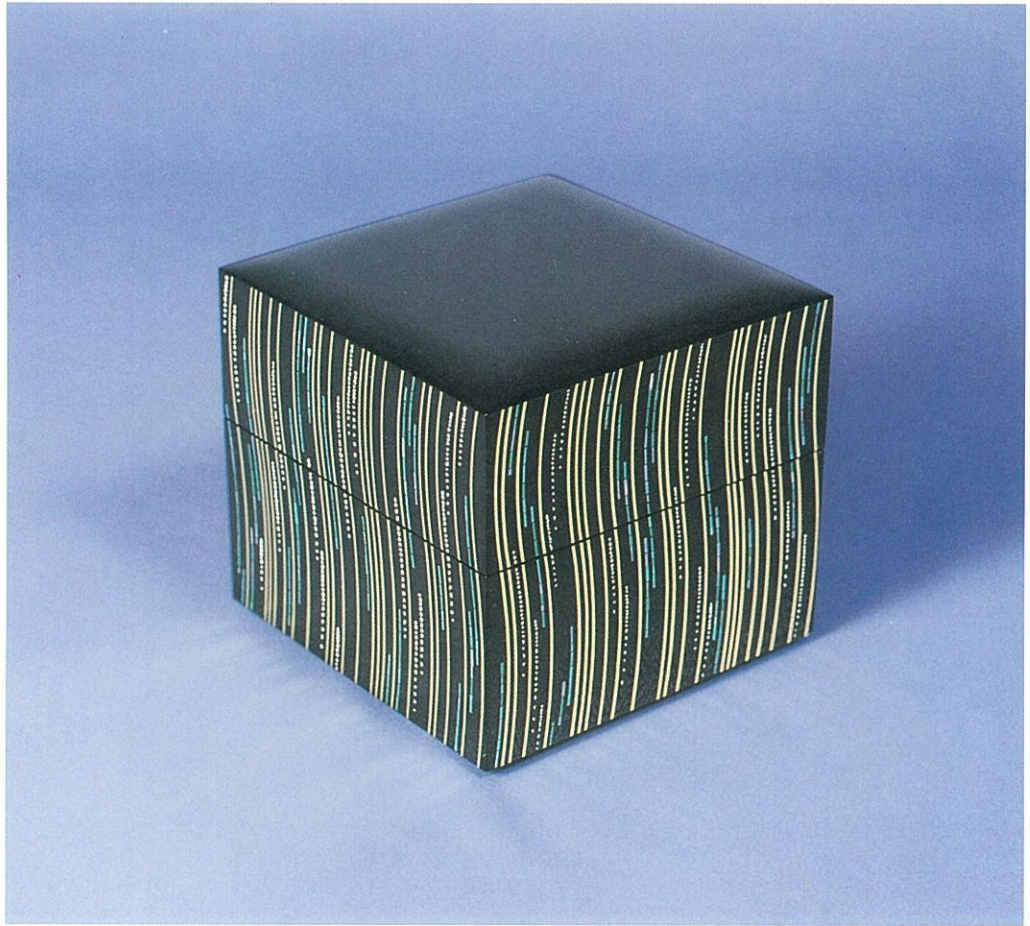
四季折々の自然を体験・体感することによりそのリズムを体の中に吸収し、そして同化していく。

漆の艶やかな黒には引き込まれそうな魅力がある。溪の夜、漆黒の闇の中にいる私の体の自然のリズムは漆という素材の力を借りて生まれ出ようとしている。

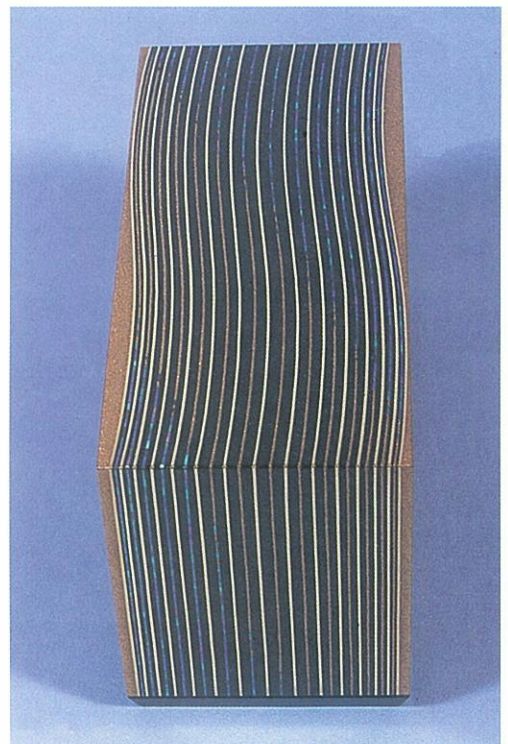
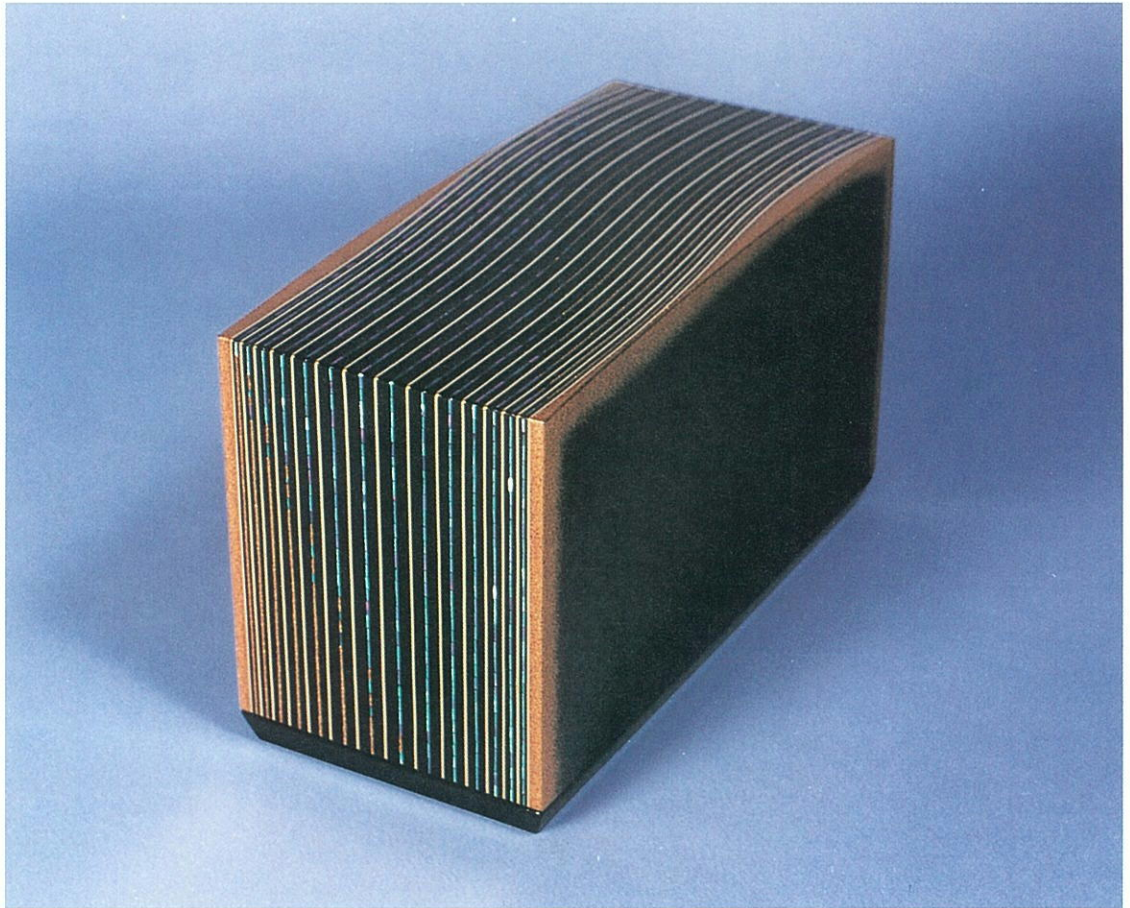
息をひそめ私は眠りについた。



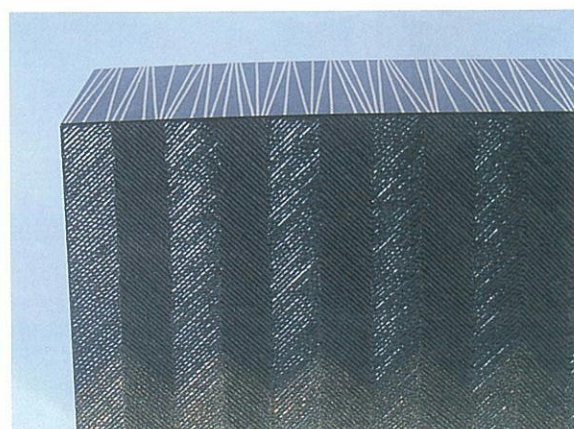
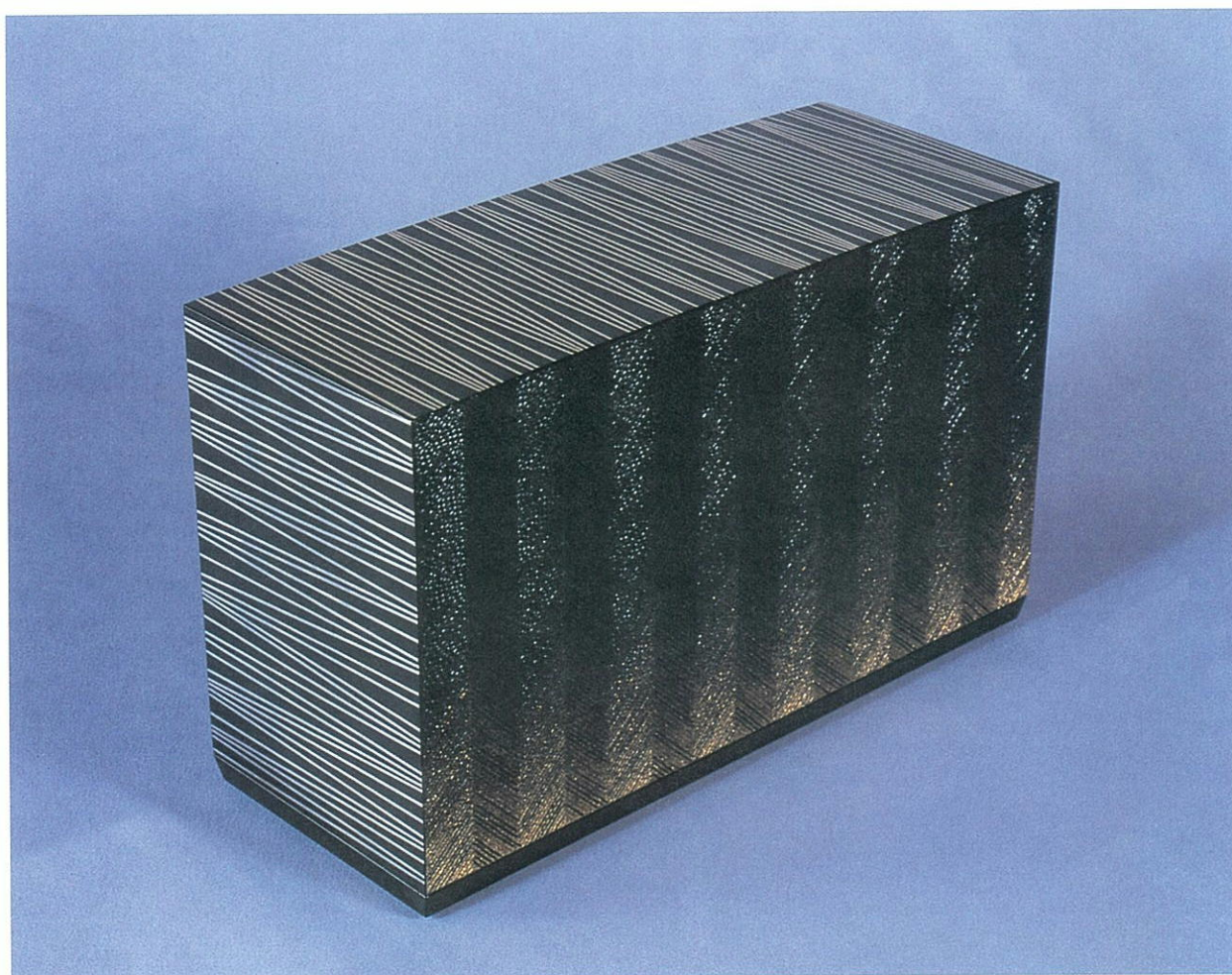
平文蒔繪箱「銀影」1995年 113 × 280 × 143mm



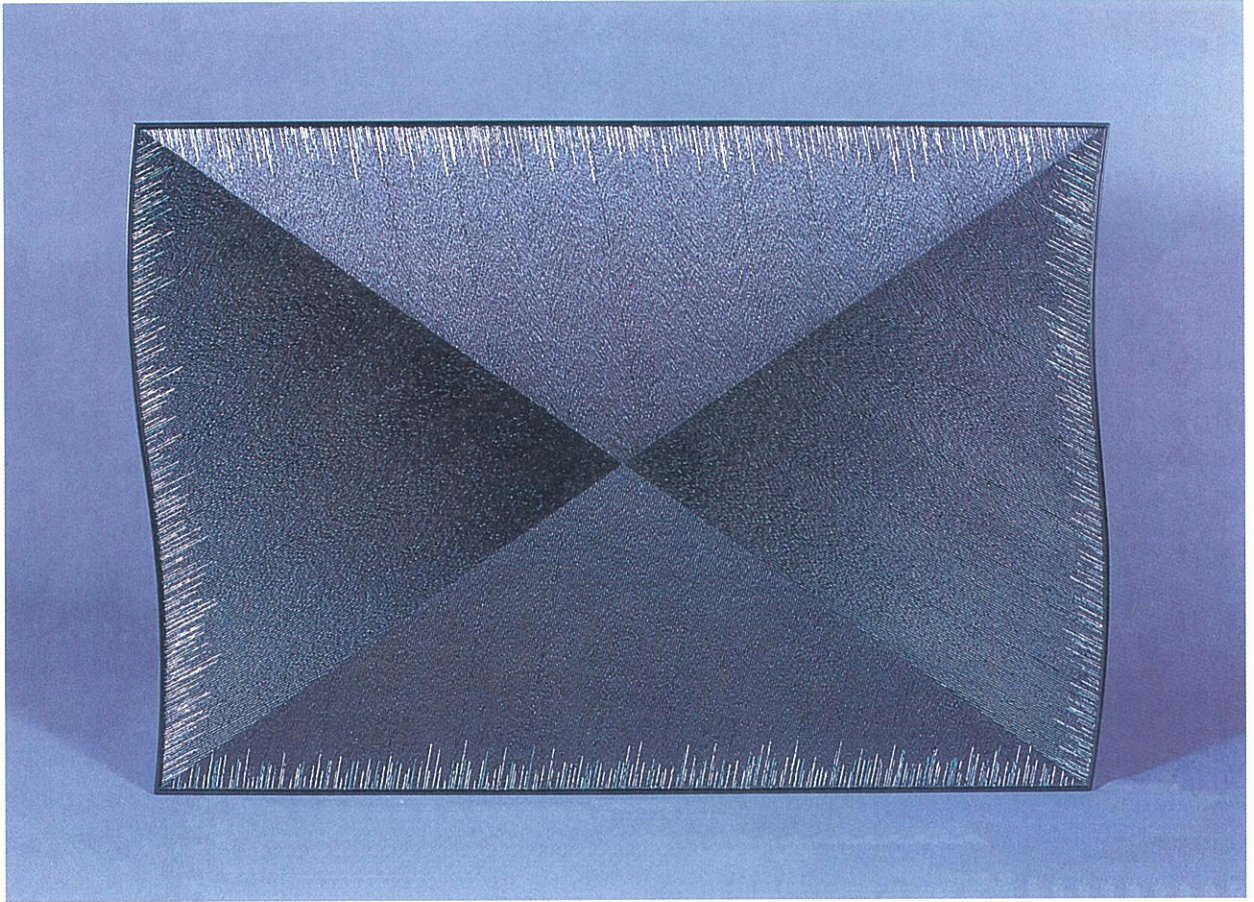
平文小箱「瀬音」1995年 101 × 101 × 95mm



平文蒔絵箱「春流」1992年 90×200×120mm



平文蒔絵箱「森の初冬」1989年 105×260×160mm



「黒の盤」 1987年 360 × 500 × 10mm